ワークショップによる校内・地域における連携・協働の輪づくりのヒント
―センター的機能のさらなる展開に向けて―

Ⅰ．はじめに

本プロジェクト研究では、所内メンバーや研究協力者同士のパートナーシップ（連携・協力関係）の構築のために、ワークショップという手法を使って初年度の研究協議会を行った。ワークショップは、「先生や講師から一方的に話を聞くのではなく、参加者が主体的に議論したり、言葉だけでなく体や心を遣って体験したり、相互に刺激し学びあう、グループによる学びと創造の方法」（中野，2001）である。ワークショップは、グループの共同作業を通じて、パートナーシップ（連携・協力関係）の形成が促されるという効果と、前向きに取り組んでいくための希望や勇気を得られるというエンパワメントの効果を生み出す可能性を持っている[涌井（小島），2002]。

地域におけるセンター的機能の展開において、地域の他機関との連携関係の構築がさかん叫ばれ、「○○連絡協議会」等が設置される等の取り組みが行われているものの、顔合わせと機関の紹介程度の会議で終わっている場合も多い。真の連携関係の構築の具体的なノウハウや手法はまだまだ明らかになっておらず、手探りの状態である。また、外との連携を学校全体の取り組みとして進めるためには、校内の共通理解を得るなど、内（校内）での連携・協力関係をつくっていくことも重要である。

そこで、本稿では、校内・地域における連携のネットワークを構築するための具体的なヒントとして、本プロジェクト研究で実施したワークショップのいくつかを紹介する。さらにワークショップについて知りたい方は、文末に掲載した関連図書一覧を参照して頂きたい。

なお、最近では連携という言葉の類語として、「協働（collaboration）」という用語も使われるようになった。関係者・機関がともに協力して働き、新たな活動やネットワークや産み出すことを意味するようである。連携よりもより具体的な協力関係をイメージさせる言葉として最近多用されているようである。ワークショップにおける共同作業はまさに「協働」である。したがって、以下の文章では連携ではなく「協働」という言葉を使用することとする。

Ⅱ．ワークショップの構成とファシリテーター

ワークショップにはいわゆる先生や講師はいない。その代わりにファシリテーター（進行役、引き出し役）が参加しやすい環境や雰囲気を作り、参加者の興味や意欲を引き出しながら場を展開していく。ファシリテーターの役割は、「中立的な立場でチームのプロセスを管理し、チームワークを引き出し、そのチームの成果が最大となるように支援する(Rees, 1998)」ことである。本プロジェクト研究では、ワークショップ・ミューの西直人氏をファシリテーターとして迎えた。西氏はワークショップ企画プロデゥーサーやファシリテーターとして活躍されている人物である。ある組織内の人物がファシリテーター役となる場合、「中立的な立場」を保つためには十分な配慮と力量が求められ、かなり難しいが、不可能ではない。ただし一度は第三者をファシリテーターとしたワークショップを体験することを勧めする。

ワークショップの一般的なプログラムの構成は、「導入（つかみ）」→「本体」→「まとめ」である（図１）。どんな分野のワークショップでも、①いろいろな体験をし、そのあと②まず個人でふりかえり、その後、③他者と分かち合い、④さらに自由に話し合う中で学びを深めていく、という流れを取ることが多い。「アイスブレイク」は、緊張・不安・期待･･･などから参加者やファシリテーターや参加者同士の心に張られた「緊張の氷」を、ゲームなどを用いて解きほぐすための活動である。プログラムの初期の段階で行うことにより、参加者が積極的に参加できるような人間関係と自由で安心する雰囲気を作ることができる。これはプログラム全体に大きな影響を及ぼす大切で、かつ欠かせない時間である。これに加えて、そのワークショップのテーマに沿ったアクティビティ（体験的活動）が用意される。

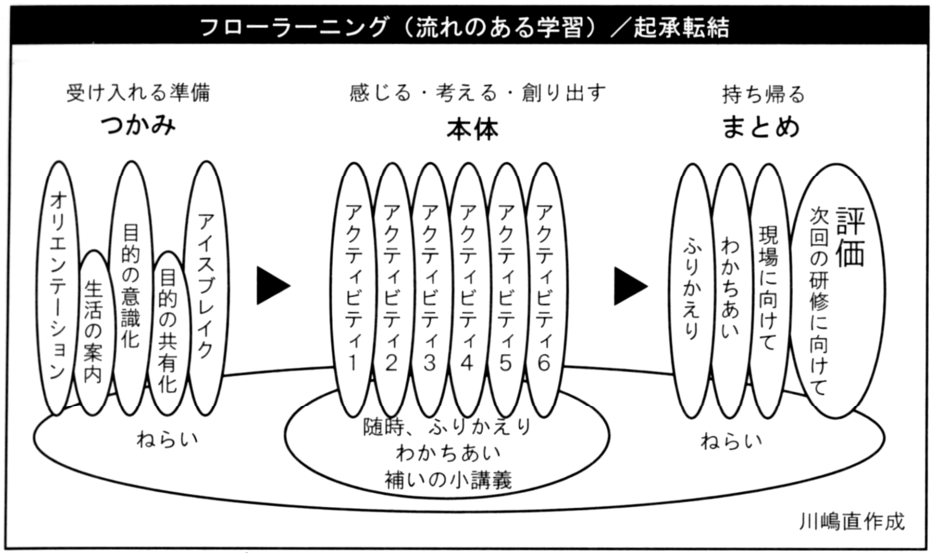

図1　森林環境教育プログラムデザイン(宿泊型指導者養成の場合)（川嶋・藁谷，1999）

Ⅲ．ワークショップの実際

本プロジェクト研究で実施したワークショップのアイスブレイクやアクティビティのいくつかを紹介する。

１．アイスブレイク

１）究極の選択

「好きな季節は？」、「好きなお酒は？」、「どうしてこの協議会に参加したのか？」、「今の気持ちは？」などの質問対して、４つの回答の選択肢が示され、部屋の　四隅に場所が割り当てられる。自分にもっとも近いと思う回答を選び、その場所へ移動する。すると、同じ回答を選んだグループができる。自然に同じグループ同士会話が発生する場合もあるし、ファシリテーターがなぜその回答を選んだのか話し合うように指示を出すこともある。質問を経るにつれ、徐々に参加者の表情もゆるみ、笑い声や会話が増えていった。

２）デート・ゲーム

まず、A4 大の紙を四つに折って折り目をつけた後、左上には簡単な①自己プロフィール、右上には②好きな物を 10 個、左下には③今回の協議会で知りたいこと、左下には④知っている情報やこのプロジェクト研究への意気込みを各自が書き込んでいく。

次にもう一枚 A4 大の紙を用意し、七分割し、月～金曜日までの欄を作る。ファシリテーターは７人の人とデートの約束を取り付け、その用紙に曜日毎に相手の名前を記入するよう指示する。全参加者がデートの約束を取り付け終わったら、ファシリテーターは「では、月曜日の人とデートしてください。まず①について話してみてください」などと指示をする。順次７名の参加者と①から④を話題に会話をしていく。

このアイスブレイクでは、最初に会話のトピックスを準備しておくので、初対面の人とでも話しやすいようになっている。西氏によれば、デート・ゲームは長期間のプロジェクトの場合の人間関係づくりに特に有効であるという。

２．アクティビティ

１）ポテンシャル分析

これは、自分の組織を知るためのワークとして行われた。ポテンシャル分析は、言ってみれば、個別の指導計画を作成するときに最初に行う、子どものアセスメントのようなものである。つまり、組織の実態、能力についてのアセスメントである。まず、各人に「ハードウエアー（目に見えるもの）」、「ソフトウエアー（目に見えないもの）」、「ヒューマンウエアー(人材)」それぞれにおける強み／弱み、さらに、「施設（組織）の使命（仕事／役割）は？」という欄が設けられた A3 大の用紙に、各項目について各自記入していく。各人の記入が終わった後、テーブルに全員の用紙を並べ、お互いに参観しあった。その後、３～４人の小グループに分かれ、それぞれの組織につい

て、気づいたことや感想を言い合った。ポテンシャル分析では、自分の組織の強みを活かしてどのようなことが実現可能か、弱みをどうすれば補うことができるのかなどを考えるとよい。他者との話し合いによって、自分では今まで気づいていなかったことに気づいたり、弱みと思っていたことが他者から見ると強みになっていたりと、様々な気づきをえることができた。参加者たちはセンター的機能の開発における何らかのヒントをつかんだようであった。

２）ネットワーク分析：

中央に自分の所属施設名が書かれた付箋紙(ラベルシールなどでもよい)を貼り、周囲に関係のある施設名や人名を書いた付箋紙を貼り、矢印やことばで結び、関係図を作る。このネットワーク分析では、インフォーマルな(正式でない、あるいは個人的な)連携関係なども記していくことによって、より現実的なネットワーク像を捉えることができる。

Ⅳ．終わりに

西氏によるワークショップは好評を博し、プロジェクト研究の展開への意欲づけや、合意形成、研究協力者間の関係作りに有効であったと思うという感想を参加者から頂いた。ワークショップでは、グループの相互作用の中で、自分一人では考えもつかなかったアイデアが湧いてくることがある。このような、単なる個の総和を越えた力を生み出す作用を「シナジー（Synergy）」あるいは「協働作用」という。様々な立場や価値観の違う者同士が、議論したり、価値観を共有したり、相手との違いを認識したり、相互に刺激し合い学び合うことを通じて、合意が形成され、課題解決のための行動計画が生み出される。

ワークショップの持つこのシナジー効果は、環境運動やまちづくりなどの市民活動の分野のみならず、ビジネスの分野でも注目されている。本研究所の平成１６年度短期研修知的障害コースや特別支援教育コーディネーター指導者養成研修では、ワークショップの手法を取り入れた参加型の演習を設ける予定であるが、特殊教育分野におけるワークショップ研究やパートナーシップに関する研究はまだ数少ない。他分野における先行事例やノウハウを参考にしつつ、障害のある子どもたちの支援の協働の輪を広げていくためには、今後、特殊教育分野における独自のアクティビティを開発していくことが必要だろう。

◆ワークショップに関連する図書等

堀公俊（2003）問題解決ファシリテーター―「ファシリテーション能力」養成講座―．東洋経済新報社

中野民夫（2001）ワークショップ―新しい学びと創造の場―．　岩波新書

中野民夫（2003）ファシリテーション革命―参加型場づくりの技法―．岩波アクティブ新書

愛・地球博ボランティアセンター（2003）平成１５年度ボランティアリーダー研修前期報告書.

涌井（小島）恵（2002）教師間のパートナーシップ形成に運用可能なワークショップに関する研究. 文部科学省科学研究費補助金基盤研究(c)(2)「知的障害児の指導に関与する教師のトレーニングプログラム開発に関する研究」報告書，63-67

引用文献

川嶋直・藁谷豊（1999）森林環境教育プログラム．全国森林組合連合会「ふれあい・まなび・つくるー森林環境教育プログラム事例集ー」p.14-19.

中野民夫（2001）ワークショップ―新しい学びと創造の場―．岩波新書

Rees, F. (1998) The Facilitator Excellence Handbook: Helping People Work creatively and Productively Together, John Wiley & Sons Inc. 黒田由貴子・（株）ピーワイ・インターナショナル（訳）ファシリテーター型リーダーの時代，プレジデント社.

涌井（小島）恵（2002）教師間のパートナーシップ形成に運用可能なワークショップに関する研究. 文部科学省科学研究費補助金基盤研究(c)(2)「知的障害児の指導に関与する教師のトレーニングプログラム開発に関する研究」報告書，63-67.

（涌井　恵）